

交流集会 3

臨地実習指導者・地域住民が参加する 看護技術演習の実際からみた教育の現状と課題

Simulation-Based Learning with Simulated Patients and Clinical Instructors in Nursing Skills Training, The Current State and Issues

澁谷 幸¹⁾ 柴田 しおり¹⁾ 玉田 雅美¹⁾
Miyuki Shibutani Shiori Shibata Masami Tamada

稲垣 聡¹⁾ 花井 理紗¹⁾
Satoshi Inagaki Risa Hanai

1. はじめに

看護基礎教育機関で実施される看護技術演習は、臨床現場で必要となる看護技術の基礎的実践能力を培うことが目的である。しかし、学生が、臨床で実施可能な看護技術として習得することは、臨床現場と実習室環境との違いや人と接することへの苦手意識などにより、ハードルの高い学習内容でもある。

このような現状から近年は、模擬患者や高機能シミュレーターを用いた演習により臨床実践を想定した技術習得をめざすシミュレーション教育が注目されている。本学では、地域住民を模擬患者とする看護技術演習を実施してきたが、2015年度からは基礎看護学実習で指導を担当する臨地実習指導者（以下、指導者とする）も加えた総合技術演習を実施している。この技術演習は、学生にとって地域住民や臨床の看護師など初対面の人と接する機会になり、基礎看護学実習に向けた準備学習になると考えている。また、指導者や教員にとっても、臨地実習における指導力向上とともに、学校と臨床との交流促進の機会として有効であると思われる。今回の交流集会では、この総合技術演習の実際と、指導者や学生

を対象とした調査結果について報告した。また、本演習に参加した指導者や地域住民、教員の体験を発表し、学校と地域・臨床の協働的教育活動について参加者とともに検討した。

(澁谷 幸)

2. 総合技術演習の実際

1) 「総合技術演習」を企画した背景と、基礎看護学科目における位置付け

学生が初めて「看護者」の立場で実習する「基礎看護学実習」では、それまでの学習環境と臨床状況のギャップへのとまどいが、臨地での学習のハードルの一つになっていた。学内という学習の「場」で実習の橋渡しになるような「臨地実習に近い学習」の方法を模索した結果、ベッド周辺を実際の患者の入院環境を模した状態に創り、模擬患者（Simulated Patients:SP、以下SPとする）と指導者の参加により、臨床看護場面をシミュレーションした演習を企画するに至った。開講は、基礎看護学実習の履修直前にあたる演習科目に位置付けた。

1) 神戸市看護大学 Kobe City College of Nursing

2) 演習方法

学生グループは、基礎看護学実習のグループ（学生5～7人）とし、各グループがSP 1名を担当できるように教育ボランティアを配置し、可能な限り実習予定病棟の指導者がグループ指導にあたるような構成とした。学生は、事前に担当する患者の情報を得て、援助計画を立案し、技術の練習をして臨んでいる。

演習時間はおよそ3時間で、グループ内で看護師役を交代しながら患者と関わり、援助（バイタルサインの測定、清潔ケア、車椅子での移送）を実施すると共に、指導者との計画調整や報告も体験し、SPからのフィードバックを受けた。

3) SPの状況設定

SPを担うのは、教育ボランティアとして本学に登録された地域住民の方々であり、SPとしての特別なトレーニングを受けていないことが特徴である。患者設定は、肺炎で入院し点滴治療中であることを基本とするが、仕事や生い立ち、家族や生活状況については、教育ボランティア自身の情報を学生に提示している。場合によっては、入院のきっかけとなった疾患や予定の検査も教育ボランティア自身の経験に合わせてアレンジしている。これは、教育ボランティアに自分らしく患者役割を担っていただくことで、自然なりアクションが生まれ、よりリアルな演習場面を創り出すことをねらっているためである。

4) 演習までの準備

開講前年度の2月頃から授業計画が始まり、順次参加者の募集と説明会を開催している。指導者は教務委員会と実習運営委員会、教育ボランティアは地域連携教育研究センターの協力を得て募集している。演習の1ヶ月ほど前には、学生へのオリエンテーションを行い、課題提示と教育指導を始めている。

5) 演習の様子

交流集会では、演習開始前のスタンバイの様子から、学生とSPとの出会い・ご挨拶の場面、計画調整や各援助場面、振り返りの様子を写真で紹介させていただいた。

(柴田 しおり)

3. 研究結果報告

1) 学生にとっての総合技術演習

2017年度に調査を行ったところ、基礎看護学実習を履修している学生の約9割が「総合技術演習は基礎看護学実習に役立つ」と回答した。その理由として、学生にとっては初対面の教育ボランティアが患者役であることによって、緊張感や責任感を持つことができる体験になったことなどが挙げられた。学生は、患者役の教育ボランティアとどのように関わるか、どのように声をかけるべきかを悩む体験をしており、実習での患者への関わりに近い体験ができていた。また、失敗のできる学内だからこそ思い切ってきたと、学習環境が自身の学習状況に適していたとも回答している。さらに、指導者が演習に参加することによって、実習の雰囲気疑似体験できることや、実際に看護師が患者とどのように関わっているかを直に見ることができたことも、総合技術演習が役立つ理由として挙げられた。

一方で、指導者の参加状況によって、学生が感じる総合技術演習の役立ち感に影響があった。指導者が参加していないグループの学生は、参加しているグループの学生と比べると、基礎看護学実習への役立ち感が低かった。特に、演習中に指導者から指導を受けられた学生と、指導を受けられなかった学生では、総合技術演習の役立ち感が違っていた。このことから、総合技術演習の学習効果を高めるには、指導者が演習において、臨地実習で指導しているように介入していくことが必要であることが再確認できた。

(稲垣 聡)

2) 臨地実習指導者にとっての総合技術演習

総合技術演習に参加した指導者の経験を明らかにするために行った研究（澁谷ら、2016）では、演習に参加した指導者4名に対して、演習後にフォーカスグループインタビューを、基礎看護学実習後に個別インタビューを行い、そのデータを質的記述的に分析した。この時は、指導者が演習に加わるのは初めてであったため、学生指導は行わず演習の様子を観察するという方法で演習に参加してもらった。

研究の結果、指導者は〈SPと関わる体験は学生にとって学習効果が高い〉〈SPの意見は自分にとって有効だ〉と【SP活用の有効性に気づいた】しており、〈最近の学生の傾向がわかった〉〈学生の学び

の状況が理解できた)〈学生は適切な援助ができない〉と【学生の様子がわかった】と感じていた。また、演習が〈実習につながる学習機会になっている〉〈実習指導に対する示唆が得られた)とする一方で、〈学校と臨地実習とのギャップは埋められていない〉〈教員の指導に疑問を感じる)と認識しており【実習につながる学習指導について考え(た)】ていた。さらに、〈患者との関わり方の指導に力を入れた)〈患者の安全を守りながら援助できるように注意した)〈学生の特徴を踏まえた指導を心がけた)と【演習での学生の様子を踏まえて指導した】、【演習での教員の様子を踏まえて指導した】、【学校と臨床との違いを考えて指導した】と実習指導に活用していた。([]は研究結果におけるカテゴリ、〈 〉はサブカテゴリを示す)

2016年度の研究後、指導者には、学生の援助に同行したり学生から報告を受けたりなど、臨地実習での指導と同様に学生に関わってもらった。また、事前に教員と打合せを行い指導方針や参加のタイミングについて確認を行った。現在では、指導者のほぼ全員がバイタルサイン測定や清潔援助、報告に関わっている。2017年の実習直後に行った指導者へのアンケートでは「学生がどうしてその行動をとったのか、考えるプロセスを知ることができた。学生が色々考え悩みながら演習に臨む姿がみられて、良い経験になった。」という意見があった。また一方で、「一緒に援助を行う時どこまで入るべきか、学生主体で気付けるように支援できればと思ったが難しかった。」と、学生指導に対する戸惑いの声も聞かれるようになった。

そして、参加した指導者のほぼ全員が「総合技術演習は実習指導に役立ちそう」と回答しており、その理由としては「学生たちが普段生活している場なので、緊張している時、失敗してしまった時、学生同士の関わりなど、より自然な姿を見ることができた。」と、実習では見られない学生の様子を知ったこと、そのような学生の状況をスタッフにも伝えるなどして、「受け入れ側の体制を整えていくことが必要だ」と感じたことを挙げていた。他にも、「事前に教員と学生との顔合わせができコミュニケーションがとれたので、実習に取りかかりやすい。」「教員から(学生指導についての)アドバイスを聞いて、実習の際には学生に(行動の修正ではなく)問いを投げかけたいと思った。」と、本演習での体験を実

習指導で具体的に活用しようとする意見もあった。

以上のことから、本演習は指導者にとって、SPや学生の声を聞きながら学生への指導方法を考える機会になっていると言える。臨床では、指導者は患者の安全を守る責任があり、時間の制約もあるが、本演習は、学生の援助場面を教員と指導者が共有しながら一緒に学生指導や教育を考えていく場にできると考える。

(玉田 雅美)

3) 今後の総合技術演習－臨地実習指導者・教育ボランティア・教員による意見交換－

本交流集会では、総合技術演習に参加した指導者、教育ボランティアにもご参加いただいた。これらの方々と教員が登壇し、総合技術演習についてそれぞれの立場から意見を述べ、また、交流集会会場の参加者からも意見をもらうことで、これからの総合技術演習について検討した。

まず、指導者の立場からご参加いただいたのは、国立病院機構神戸医療センターで病棟副師長兼指導者をされている福田朗子氏であった。福田氏は、2016年・2017年の2回、本演習に参加いただき、学生指導に関わっていただいた。福田氏は、初めて参加した際に、それまで基礎看護学実習で目にしていた学生の姿とは異なる姿を発見したと言われた。それは、患者に触れることさえためらうなど患者の前で緊張に震える学生の姿であり、基礎看護学実習に出るまでの学生がいかに未熟で緊張に満ちているのが理解できたと言われた。これは、指導者は、そういった学生の学内の様子についての理解が十分ではないことを意味している。福田氏は、本演習は、実習で指導する学生のありのままの姿を理解することで、実習指導を充実させられる利点が大きいと言われた。演習で顔を見た学生と実習で再会することになるということは、学生の緊張を緩和するだけでなく、指導者にとっても心構えができるのである。さらに、この演習への参加を通して、教員との心理的距離が近くなったことも良かったこととして挙げられた。

教育ボランティアの立場からご参加いただいたのは、大屋庄平氏であった。大屋氏は、本学の教育ボランティアとして長年貢献して下さっている方である。教育ボランティアとは、本学において、数年前に現代GPが採択された際に、その活動の一環として大

学近隣に在住する地域住民の方を学生の教育活動に関わっていただくボランティアとして募集したものである。大屋氏は、その募集当初から教育ボランティアに登録いただき、以来10年以上にわたって本学の様々な授業や研究活動にご協力くださっている。本演習にも初回から毎回ご参加くださり、学生への貴重なアドバイスとともに、教員にもより効果的な演習にしていくなめのご助言をくださっている。

大屋氏は、まず、本学の教育ボランティアに登録しようと思った動機からお話くださった。大屋氏は、60代で大病を患った折に、医療者、特に看護師の仕事内容や仕事ぶりに感銘を受けたという。そして、企業戦士として仕事中心に働いてきたそれまでの人生を振り返り、残りの人生は、そういった人達に恩返しできるような活動をしたと考えていた。そこに本学の教育ボランティア募集を知り、わざわざ本学の近隣に自宅を移してまでボランティア登録をしてくださったということだった。そして、教育ボランティアとして活動し始めてから以降、大きな病気どころか病院のお世話になること自体一度もなかったと言われ、本学の活動がいかに地域住民の健康生活に貢献しているかを力説された。また、学生や大学に貢献したいと思って始めたことだが、かえって自分がたくさんのもをもらっているのだとも述べられた。特に、学生がみんな一生懸命に学習しており、教育ボランティアの助言を真剣に聞いてくれることが、何よりも励みになっていると言われた。総合技術演習については、初期の頃は、患者の病状として設定されている「肺炎」の症状や患者の状況がわからず、身近な医療職に肺炎の症状について尋ねたり、自分で調べたりなどして、どのように振る舞うと肺炎患者らしくなるかを試行錯誤しながら学生と接していたという。しかし、最近では、患者を演じるよりも「自分らしく」ベッド上にいることが大事だと思うようになったということだ。その理由は、学生は生身のひととの関わりを学んでいる段階であるのだから、病気の症状をリアルに演じることよりも、ひとりのひととして、学生に接すること、つまり、自分が看護師にされて嫌なこと、苦しいこと、嬉しいことをそのまま言葉にして学生に返す方が、学生はより多くのことを学べるのだと知ったからである。そう思うようになって、初期の頃感じていた患者役の難しさを最近ではさほど感じなくなったという。大屋氏は、最後に、総合技術演習は、教育ボ

ランティアとして直接学生に自分の意見を述べることができるとてもやりがいを感じられる演習であり、このような演習が継続されることを願っていると言われた。

次に、本演習について教員の立場からの意見である。花井氏は、看護管理学分野に所属する教員であるため、基礎看護技術演習は担当科目ではない。そのため、学生の看護技術演習に関わる機会がない状態で基礎看護学実習指導を任される立場にある。そのような教員にとって、本演習は、学生のレディネスを具体的に知る機会として重要であるという。例えば、本演習において、腰痛をもつ患者が痛みで顔をしかめながら起き上がろうとされた際に、学生が何も手を出せずに立ち尽くしていたという場面があった。その学生の演習後記録には、患者の痛みを増強させてしまったこと、なにもできず無力感を抱いたことなどが記載されていた。しかし、この演習中、花井氏は、学生が患者の痛みを目の前にして恐怖に近い感情を抱いていたことを考えられていなかった。花井氏は、学生が「痛みがある人」に関わることが初めてであることを考慮できておらず、学生のこころを理解できていなかったと振り返った。この場面は、学生にとっては「痛みをもつ患者に向き合う」という体験であったが、教員にとっても実習に向かおうとする学生の準備状態をより詳細に理解する機会になったとのことであった。

臨地実習現場では、学生の体験を教材化し発問することが教員に求められる。しかし、教育経験の浅い教員にとっては、そこに難しさがある。本演習は、そういった場面を学生や指導者、教育ボランティアとともに丁寧に再構成することも可能である。つまり、臨地実習では立ち止まって考えることができない場面でも、本演習ではそれを一旦「フリーズ」させて考えることで丁寧に教材化し、看護の学びに変えていくことや、その指導方法を学ぶ機会にすることができる。これは、本演習が、教員にとっても重要な学習機会となっていることを示しているといえる。

本交流集会では、会場の参加者からも意見ももらった。会場にはかつて本演習を経験した本学の学部4年生が数名参加していた。これらの在学生に対して、この演習を経験した感想を聞きたいとの意見が会場から出された。在学生は、本演習は、実施されているのが当然と考えていたが、他校ではこのような演習がないことを知って、基礎看護学実習に向

かう自分達にはとても役立っていたと思うと述べた。特に、学内演習では学生同士での援助の経験になるため、一般の方への援助を経験することはできない。本演習は、学生ではない一般の方への援助として初めての経験であることに加え、実習における指導者の見守りがある中での援助や報告の仕方などを具体的に経験でき、実習がどのように行われるのかを知る手がかりになったと述べていた。

意見交換の最後に、指導者である福田氏から、会場に来ていた本学学部生に向かって、このような演習が企画される大学で学べることに誇りと自信をもってほしいこと、また、充実した実習室や教授陣がいる利点をもっと活用して、卒業までに自分の技術を磨いてほしいことを呼びかけられた。そして、今後は、指導者が演習の企画や運営段階から関わっていけると、より臨床的で効果的な演習になるのではないかと述べられた。本交流集会を通して、参加者からのこのような意見を聞いたことは、これからの総合技術演習をより発展させていく手がかりを得られたのではないかと思われる。

(澁谷 幸・花井 理紗)

4. まとめ

総合技術演習は、基礎看護学実習における学生の緊張度の高さを何とか緩和できないかと様々に検討する中で生まれた演習であった。特に、本学は早期暴露に相当する早期体験実習などの患者を受け持つ実習に先んじる実習が設定されていない。そのため、基礎看護学実習を履修する学生は、初めての病院、初めての病棟、初めての看護師、初めての患者と、何もかもが初めての環境下で非常に緊張して実習に臨む。本来、基礎看護学実習は、看護を志した学生にとって期待と不安が入り交じったドラマティックな経験であり、ときに、看護師人生の記憶にさえ残ることもある。その貴重な経験の場が、緊張だけで

終わることなく、看護の奥深さや興味深さ、患者との関わりの難しさも楽しさも味わうことができる場であってほしい。これが基礎看護学実習を指導する教員の願いである。総合技術演習は、そういった意味で、本学の学生にとっては模擬的早期暴露の場であり、かつ学校と臨床をつなぐ場となることを期待して始動した。しかし、時を経て、教育ボランティアや指導者の学生への期待や教育への熱い思いを受けて、良い意味で総合技術演習の意味が拡大していると言える。現在は、医療安全の観点から、臨地実習において学生が経験できることが限定される傾向にある。また、看護系大学の教員が不足しており、若手教員は、教育に関する訓練が不十分なまま実習指導に当たらなければならない状況も存在する。本演習は、このような状況下にある学生や教員、指導者にとって、それぞれの立場での学びが可能となる場であると考えられる。さらに、教育ボランティアにとっては健康の増進ややりがいを感じられる活動なのである。つまり、本演習は参加する誰しもにとっての学びを生む総合的な学習の場として発展する可能性がある。これは、企画者の当初の予想を超える展開であるが、嬉しい発展でもある。本学は地域に根ざした、地域住民とともにある看護教育を教育方針としている。この方針と本演習は大いに重なるものであり、地域の住民や看護職とともに次世代を担う看護職者の育成に貢献できるものと考えられる。

(澁谷 幸)

文献

澁谷幸, 柴田しおり, 玉田雅美, 後藤由紀子, 江口由佳, 堀田直孝, 山本純子, 中本明世, 赤田いづみ, 谷川千佳子 (2016); 模擬患者参加型技術演習に参加した臨地実習指導者の経験 - 学校-臨床間をつなぐ学習の場としての看護技術演習の可能性 -, 日本看護学教育学会誌, 26(2).